

## フィールド生物学者という生き物を知る 3冊

嶋田大輔 専任講師  
(生物学)

『昆虫の交尾は、味わい深い…。』 上村佳孝著

岩波書店 2017年

経済学部 of 学生さんが事前知識なしに楽しめそうな一般向け生物学の本を紹介したいと  
思います。ここに挙げた3冊はどれも純粋に読み物として面白く、なんとなく経済学以外  
の本を読んでみたい方、生き物に関心があるけど専門書は難しすぎるという方に最初にお  
勧めしたい本です。

1冊目から変態みたいなタイトルですが、著者の上村(かみむら)先生は昆虫の交尾器  
の形態とその進化を追及している研究者で、「メスがペニスをもち、オスの膣に挿入して交  
尾する昆虫」の存在を証明して2017年のイグ・ノーベル賞を受賞したチームの一員でもあ  
ります。なぜペニスをもっている側がオスではなくメスと呼ばれるのか、不思議に思われ  
た方は本書を手にとってみましょう。

本書では誰でも知っている昆虫から名前を聞いても多くの方はピンと来ないであろう昆  
虫まで、いろいろなグループにみられる特異的な交尾器のエピソードが語られます。本書  
は受賞の少し前に出版されましたが、一番最後にとっておきのエピソードとして、オスと  
メスの交尾器が逆転した昆虫が紹介されています。生殖や生殖器の話題はセンシティブで  
ある、下品であるとして教育の場から遠ざけられる傾向があるのは確かです。しかし、子  
孫を残す行為は生物の最も基本的な営みの1つであり、我々ヒトの社会も生殖行為を前提  
として成り立っている現実は変えられません。イグ・ノーベル賞は悪ふざけの賞ではなく、  
「人々を笑わせ、考えさせる研究」に送られる賞です。興味本位からであっても、生殖に  
ついて考えるきっかけになればいいと思います。

### ◎おすすめポイント

研究すべき謎は身近にいくらでもあると知れる本。昆虫採集を楽しんだ思い出のある方  
にお勧め。

## 『クマムシ調査隊、南極に行く!』 鈴木忠著

岩波書店 2019年

クマムシという生き物をご存じでしょうか。熱湯で煮ても冷凍しても死なない最強生物としてたびたびメディアに取り上げられているので、目にしたことがある方も多いと思います。事実、冷凍庫で30年以上も保管されていた標本から復活したり、宇宙空間に直接さらされても生きていた例があります。とはいえ、実物をご覧になった方はそう多くはないでしょう。その実態は体長が1ミリあれば「巨大」といわれるほど微小な動物で、陸のコケや土、海の砂などに棲んでおり、経済学部本館の外に生えているコケにも普通に見られます。

本書は日本を代表するクマムシ研究者の1人である鈴木忠（あつし）先生、通称チューさんによる第56次日本南極地域観測隊の調査日誌です。南極の陸上にはヒトと鳥類を除いて大型動物はいません（シロクマは北極です）が、顕微鏡サイズの微小動物は多数生息しており、しかも調査は十分に行われていません。本書では日本を出発してから帰国するまでの約3か月（うち南極滞在は1か月）の生活と調査の実際が克明に述べられており、南極などの秘境に憧れのある方、実際に仕事で秘境に赴く可能性のある方にとっての貴重な参考書です。風呂なし着替えなし、排泄物は全部持ち帰りで2週間の野外活動、しかも隊の仕事を優先させるため自分の研究はその合間を縫ってという大変な状況の中、それでも楽しさを見出しながらしっかり成果を挙げられているのはさすがというほかありません。本書の出版より後ですが、この調査で得られた試料は複数の研究者の手に渡り、多数の論文が発表されています。

なお、クマムシ自体の方に興味がある方には、ベストセラーになった鈴木先生の著書『クマムシ?! 小さな怪物』（岩波書店、2006年）もお勧めします。

### ◎おすすめポイント

人里離れた秘境でのフィールドワークの実際がわかる本。探検というワードに惹かれる方にお勧め。

## 『深海生物テヅルモヅルの謎を追え!』 岡西政典著

東海大学出版部 2016年

あまりメジャーではない生物学の分野に「分類学」というものがあります。地球上のあらゆる生物種に名前を付けて認識し、生物種どうしの進化的な類縁関係を推定し、1つの体系の中に位置づけることを目指す学問です。と聞くと難しく感じるかもしれませんが、「新種の発見」も分類学の重要な仕事であるといえば、なんとなくイメージできるのではないのでしょうか。あまり知られていませんが、図鑑に載っている動植物は全生物のほんの一部でしかなく、新種は身近な環境からも日々発見され続けています。

著者の岡西先生は日本でただ一人「テヅルモヅル」という深海動物を専門とする分類学者です。本書では学生時代から執筆当時までの研究の実際を幾多の失敗も含めて赤裸々に、学問半分、エッセイ半分の絶妙なバランス感覚で紹介されています。これを読めば、フィールド生物学者とはどんな生き物なのか、詳しく知ることができると思います。本書の特色として、海洋生物学と聞いて多くの方が思い浮かべるような華々しい調査船航海だけでなく、実験や観察、論文執筆、博物館調査といった地道な作業の紹介にかなりのページを当てており、分類学に限らず研究というものは日頃の積み重ねであるということが生々しく伝わってきます。分野外の方が読むにはやや用語や手法の話が難しい気もしますが、分からない部分は読み飛ばしても大丈夫です。

### ◎おすすめポイント

研究者とは何をする人なのか、が端的にわかる1冊。謎生物の発見に興味がある方にお勧め。

### 筆者自己紹介

嶋田 大輔 (しまだ だいすけ)

北海道大学で博士(理学)を取得し、慶應義塾大学・北海道大学・国立科学博物館での勤務を経て2024年に着任しました。専門は海産センチュウという微小動物の分類学で、日本沿岸・深海・南極の生物多様性を解明しています。